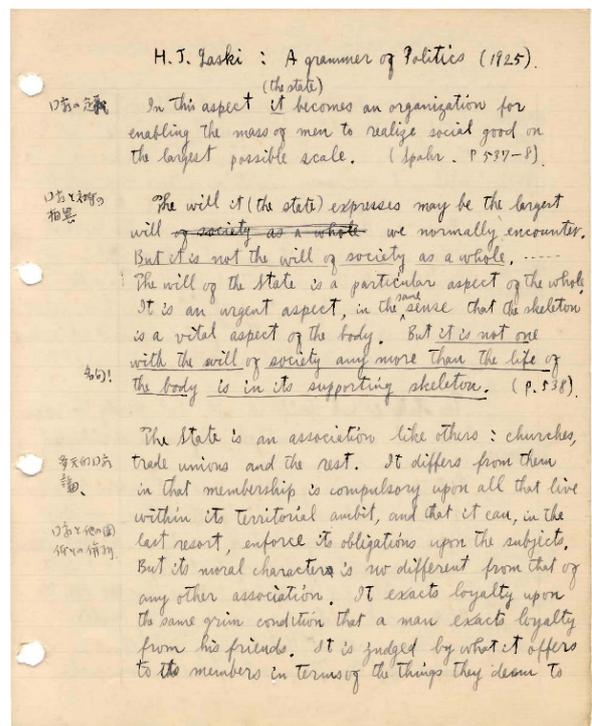


(7) 論文・執筆記事

寡作だった高校時代と異なり、大学生時代の丸山は数々の文章をものした。たとえば1年次の1月、岡義武の「政治史」講義の課題として、「明治政府の秩禄処分とその影響——武士階級の階級分化の過程に関する一考察」と題するレポートを提出している。そのために丸山は、講座派マルクス主義の立場から書かれた『日本資本主義発達史講座』（岩波書店、1932～33年）を熟読し、岡からは「立場一貫」という評価を受けた。

2年次には緑会（東大法学部教官・学生の親睦団体）の懸賞論文への応募をめざし、友人の猪野謙二とともに宮城県刈田郡越河村の寺にこもった。このときの懸賞論文の題は蠟山政道が出題しており、「デモクラシーの危機を論ず」というものだった。ドイツでは丸山の高校3年次にナチスが権力を掌握し、共産主義陣営が人民戦線路線に転じるなど、ファシズムの台頭によるデモクラシーの危機と、それに対するデモクラシー陣営の共闘体制が顕著

になった時代だった。蠟山の出題はそうした時代背景を反映したものであった。論文執筆のために、丸山はブライスの『近代民主政治』をはじめ、デモクラシー関係の文献を読みあさった。なかでも読み込んだのがラスキの『危機に立つデモクラシー』と『理論と実際における国家』である。いずれも蠟山の「政治学」講義で紹介されたものだった。結



局、2年次には懸賞論文を提出できなかったが、丸山はラスキの多元的国家論を入口に西洋諸国の政治と政治学への理解を深めていった。(前頁画像：大学時代ノート〈丸山文庫資料番号350〉)

3年次には満を持して緑会懸賞論文に応募した。論題は「政治学に於ける国家の概念」、出題者は南原繁だった。丸山の論文は第二席Aに入選し、南原の目に留まることになる。

また、随筆や翻訳にも手を伸ばした。『東大春秋』という雑誌に、山野冬男のペンネームで横田喜三郎・我妻栄・宮沢俊義を批評した「法学部三教授批評」、高眞三郎のペンネームでフェリックス・ハレ「性犯罪の社会的原因」の翻訳を寄稿している。